

## 〈報告1〉特別養護老人ホーム

# さまざまな効果を生み出す シーティングの実践

「介護老人福祉施設さわらび」では入居者の車いす座位における問題を解決するために、シーティング推進委員会を発足しました。本稿では、その活動内容とシーティングの実際の事例を紹介します。

### はじめに

「介護老人福祉施設さわらび」は、長野県内で23拠点44の介護事業を展開する社会福祉法人平成会の特別養護老人ホームです。2003年11月に開設され、定員は80人です。

2017年、当施設の職員が同法人主催の「シーティング研修」を受講し、座位姿勢が及ぼす日常生活への影響を痛感しました。そこで、施設内において「シーティング推進委員会」(写真)を立ち上げ、以降、委員会を中心に入居者の身体状況に応じた最適な座位環境を整えるためのシーティング技術の習得と実践に取り組んでいます。

### シーティング推進委員会の活動

2015年の介護保険制度の改正に伴い、特別養護老人ホームの入所要件が原則要介護3以上となりました。当施設においても入居者の重度

化が進み、2022年4月現在の平均要介護度は4.2です。そのうち、心身機能の顕著な低下により、車いすを必要とする人は大半を占めています。

車いす上の座位姿勢が不良になると、ずり落ちや局部圧による皮膚の摩擦・圧迫で褥瘡が発生したり、本人の「食べたい」という思いとは裏腹に誤嚥性肺炎を繰り返したりするようになります。また、基礎疾患の再発などをきっかけに心身機能・ADL・IADLが低下し、車いす上の座位保持が困難になるケースが少なくありません。

表1は、当施設がシーティングを導入する前の車いす座位における問題です。これらのはほとんどは不良姿勢が原因で、幾度となく姿勢を直したり・クッションを使用して姿勢が崩れないように工夫したりするなどさまざまな方法を試みましたが、どれも一時的な対症療法で、根本的な解決には至りませんでした。しかし、シーティング推進委員会を中心とした活動が始まって以降、大きな改善が認められるようになりました。

当施設が掲げるシーティングの目的と各職種

社会福祉法人平成会介護老人福祉施設さわらび  
施設長

早出 徳一  
(そうで のりかず)

同事業所  
介護支援専門員

荒崎 香苗  
(あらさき かなえ)

同事業所  
介護福祉士

丸山 詩織  
(まるやま しおり)

同事業所  
介護福祉士

野上 ゆり枝  
(のがみ ゆりえ)



写真 シーティング推進委員会のメンバー

の役割を表2に示します。当施設では、新たに受け入れた入居者に対して、体圧分布測定器で座位保持機能の評価を実施します。そこで問題がある場合は、クッションや座位補助具などを使用して座位環境を整えます。なお、身体機能や座位能力に合わせた調整機能付きの車いすを希望する入居者には、レンタルを案内しています。

シーティング推進委員会は、介護職、看護職、理学療法士、管理栄養士などの多職種から構成されています。このメンバーは、入居者の車いすの適応状況について、毎月1回行われる委員会で介護職等による日常的な観察で得た情報を基に再評価を行います。シーティングを通じて、入居者のADLの向上・意欲の回復・生活の改善に努めています。このほかにも、職員全体のシーティング技術の向上をはかるために技術研修の計画・実施や、同法人の主催する年4回のシーティング研修会でシーティング・コンサルタントから受けた助言を、職場にフィードバックする役割を担っています。

## シーティングの事例

〈事例〉 Aさん／70代女性／アルツハイマー

同事業所  
准看護師

原 初枝  
(はら はつえ)

同事業所  
理学療法士

丸山 拓也  
(まるやまたたくや)

同事業所  
理学療法士

中島 美鈴  
(なかしまみすず)

### 車いす座位における問題

表1

- ・車いすからずり落ちる
- ・姿勢を整えても、すぐに傾く
- ・首が前屈・後屈する
- ・褥瘡が発生する
- ・食事をこぼしたり、食事の途中で疲れる。むせる。誤嚥性肺炎を繰り返す
- ・疲労感があり、長時間座れない。ベッドで過ごす時間が長い
- ・臀部などに痛みが起こる

### シーティングの目的と各職種の役割

表2

#### 〈シーティングの目的〉

- ①適切な姿勢で座ってもらう
- ②背部の接触面を増やして上肢の筋緊張をとり、体幹を安定させる
- ③股関節の屈曲制限への対応
- ④臀部の接觸面積を増やすして体全体の体幹を安定させる
- ⑤食事をおいしく食べてもらう

#### 〈各職種の役割〉

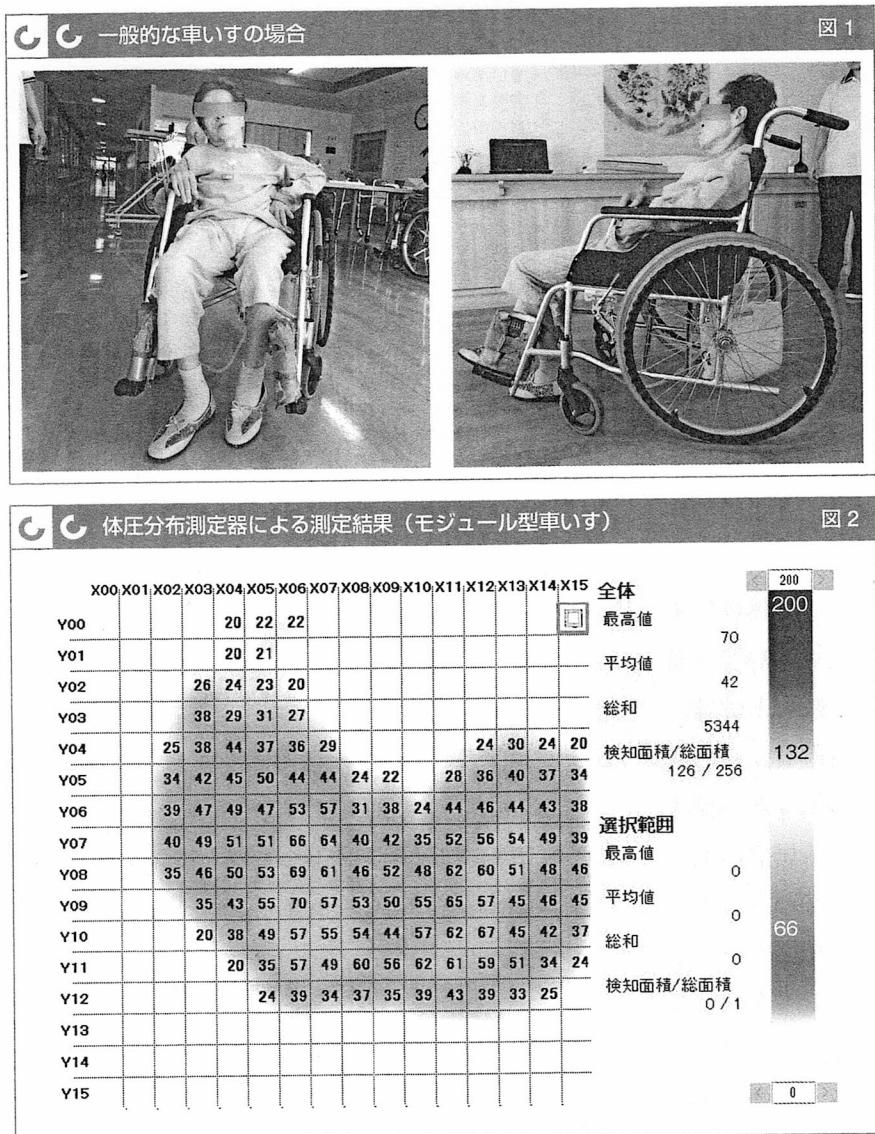
- ・介護職：日常生活の様子を観察、各職種への相談と情報提供・共有（本人の思い、車いす変更前後の様子、食事の様子、ケア中の心配事や気づきなど）
- ・看護職：全身状態・皮膚トラブル（褥瘡など）の確認、医師への相談
- ・リハビリ職：  
[理学療法士(PT)] 身体評価、体圧分布測定、Hoffer座位能力分類(JSSC版)<sup>\*1</sup>の実施・評価、車いすクッションの選定・評価  
[言語聴覚士(ST)] 嘸下機能の確認、車いす変更に伴う食事姿勢の確認・評価、体操の実施
- ・管理栄養士：栄養状態の確認(BMI評価)、食事摂取量・食形態の確認
- ・介護支援専門員：本人へのアセスメント、モニタリング等の実施、施設内・外部との調整・連携、ケアプランの作成、本人・家族に対して体圧分布測定等のデータを基に日常の様子やレンタル車いすについて説明  
※入居者の3分の2が車いすをレンタル

\*1 日本シーティング協会が開発した座位能力分類。Hoffer I：手の支持なしで座位可能、Hoffer II：手の支持で座位可能、Hoffer III：座位不能

## 型認知症・脊髄腫瘍／要介護5

Aさんは意思の疎通が困難で、生活全般に介助が必要な状態であった。入居時より股関節・膝関節・足関節に拘縮があり、座面にジェルクッションを敷いた普通型の車いすを使用していた。車いす上では身体が右側に傾き、また、

さまざまな効果を生み出すシーティングの実践



仙骨座り（ずっとこけ座り）になりがちで、幾度となく座り直しをしなければならなかった。車いすから転落するリスクも高く、身体の傾きに 対してバランスをとるためか、上肢が常に動いている状態で姿勢が安定しなかった。そのため、食事中にこぼしたり・むせたりすることが多かつた。

Aさんの場合、一般的な車いすでは座位保持

が困難であったことから（図1）、座面の高さや座幅などが調整可能なモジュール型車いすに変更しました。ところが、状態の改善は見られず、しかも体圧分布測定器の結果（図2）から仙骨部の局所圧が高いことがわかりました。さらにAさんの座位能力などをアセスメントしたところ、Hoffer 座位能力分類 II レベルで、脊柱が右側方に曲がり（右側弯）、両股関節の屈曲角度が60度と屈曲制限も生じていました。

これらにより、Aさんが右側に傾くのは側弯の影響が、仙骨座りを繰り返すのは股関節の屈曲制限が関係して

いると考えられました。そこでマット評価<sup>\*2</sup>を実施し、この結果を踏まえてティルト・リクライニング車いす<sup>\*3</sup>に変更しました（図3）。リクライニングの角度は背部の接触面を増やす・股関節の屈曲制限をカバーするために30度に、ティルトの角度は前すべりを防止するために10度に設定しました。体圧分布測定器の結果（図4）では、仙骨部の局所圧が分散され、

\*2 仰向けでの股関節・膝関節の動く角度を評価する

\*3 ティルト機能（座った角度を一定のまま倒せる）とリクライニング機能（背中を倒せる）に加え、足を置く位置の角度や頭を支える位置を調整できる。長時間にわたって、姿勢を保持する機能を備えている

臀部の接触面積が増加していました。

Aさんは、臀部全体で座ることが可能となり、背部の接触面が増えたことで筋緊張がとれ体幹が安定しました。それに伴い、体の傾きや仙骨座りの頻度が軽減し、食事もしっかり摂取できるようになりました。

## おわりに

特別養護老人ホームという「生活の場」においてシーティングを実践することには大きな意義があります。入居者の生活の質・意欲の向上はもちろん、職員のケア負担の軽減など、さまざまな効果をもたらします。

シーティングを進める上では、多職種連携がとても重要だと考えます。当施設の職員は、職種の境界を超えて各専門分野をお互いに尊重し合うことで知識を深めています。それにより相乗効果が生まれ、大きな成果につながっているのだと思います。



図3

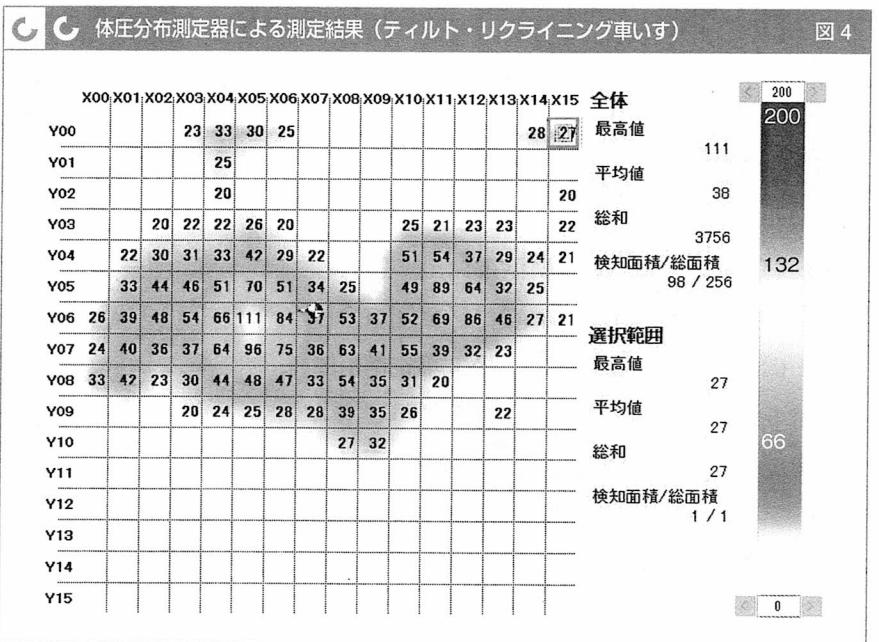


図4

さまざまな効果を生み出すシーティングの実践

### ●引用・参考文献

- 木之瀬隆, 森田智之編: シーティング技術のすべて, 医歯薬出版株式会社, p.45・106, 2020.

◆社会福祉法人平成会  
介護老人福祉施設さわらび  
〒394-0001  
長野県岡谷市西山 1723-101  
TEL 0266-21-1180  
<http://www.heisei-kai.jp/>